奉孫里見

八犬傳

七

へ13
3704
7

門へ13
號3704
巻7

辛亥の冬十一月の頃短景を夜に継て颯々たる松風の音と交して書を讀む学窓に訪ひ来る者は祖父の時より旧識なる丈溪堂の主人に来意甚厚く尋ねるに四五年先つ頃より這書賈が刊行せる國字讀八犬傳の合巻は彼麒尾才[illegible]附て青巒[illegible]千里の外まで行き現唐山なる下俚巴人其曲高かきに過ぎる故に知るものいと衆く是策子も亦その類ひ巧致の文は刪去りて稚蒙の為に解し易からを旨とせ然るに是も抄録せし者いさゝか故のあるとの本編より後の生れ予れ抄録して賜へと乞へり祖父の作を抄録するは面目あるに似れども拙劣なる強顔く推辭すれども本意なるねばせうせんと固辭再三に及べども聽れざりて熟考るに旧識とのひその懇情を斯に曾子と世の嘲も三省せば恥赫ずして序びを白地に誌すのみ

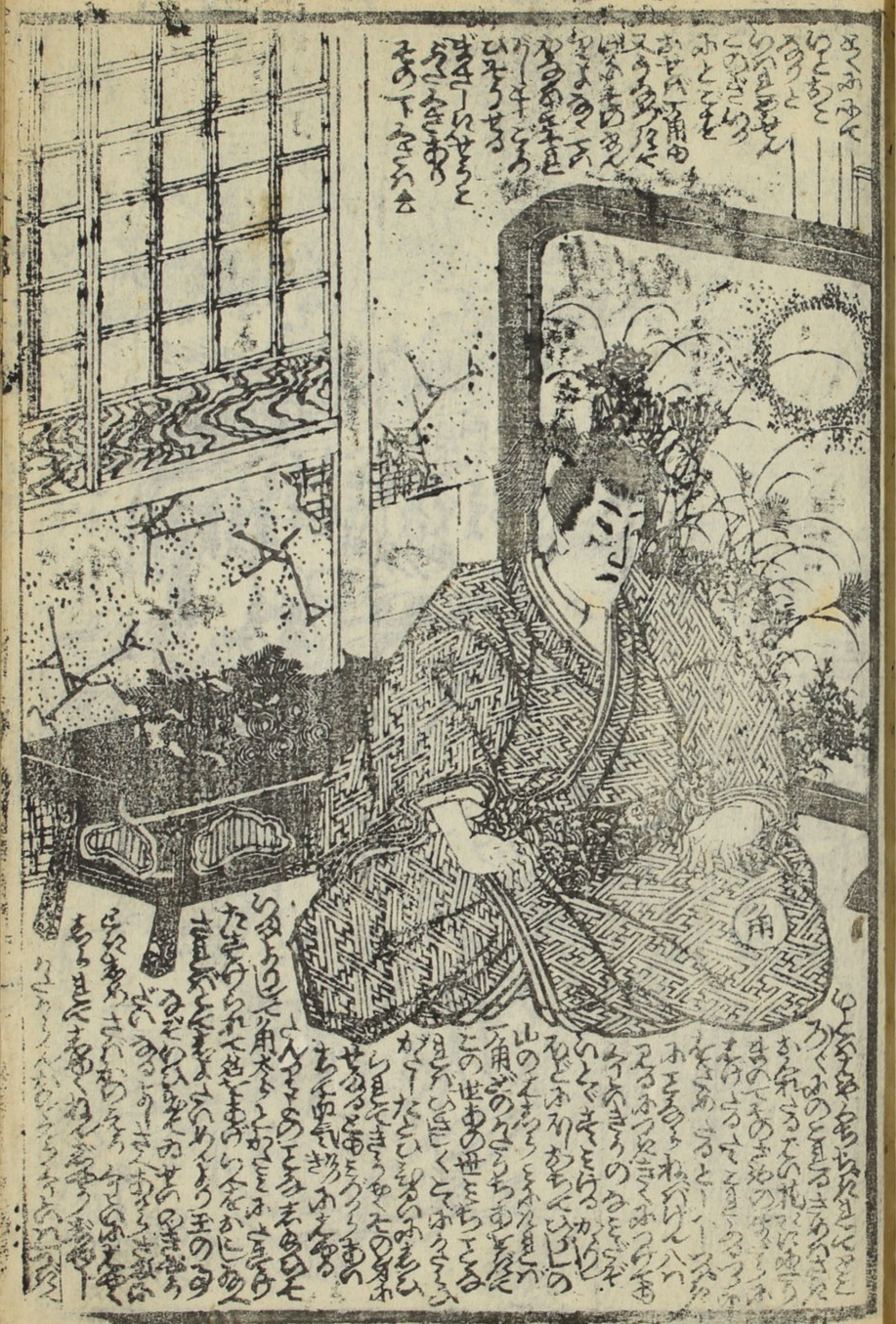
嘉永五壬子春稿成同六癸丑初春發市

鳳簫菴琴童識

赤岩一角
滝鬼
節婦
雛衣

羽黒源し
虎
東太
松風

現


角

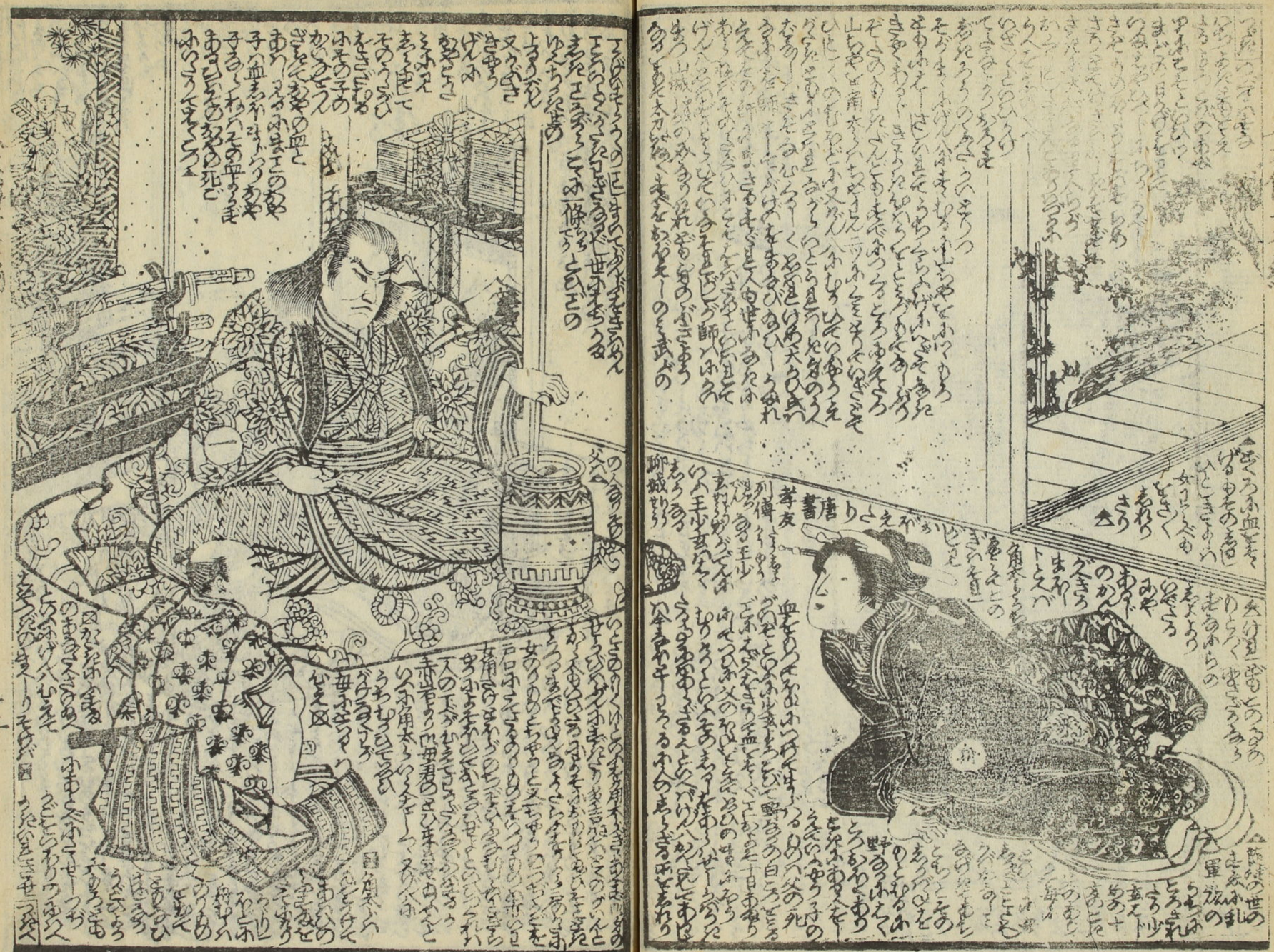
氷

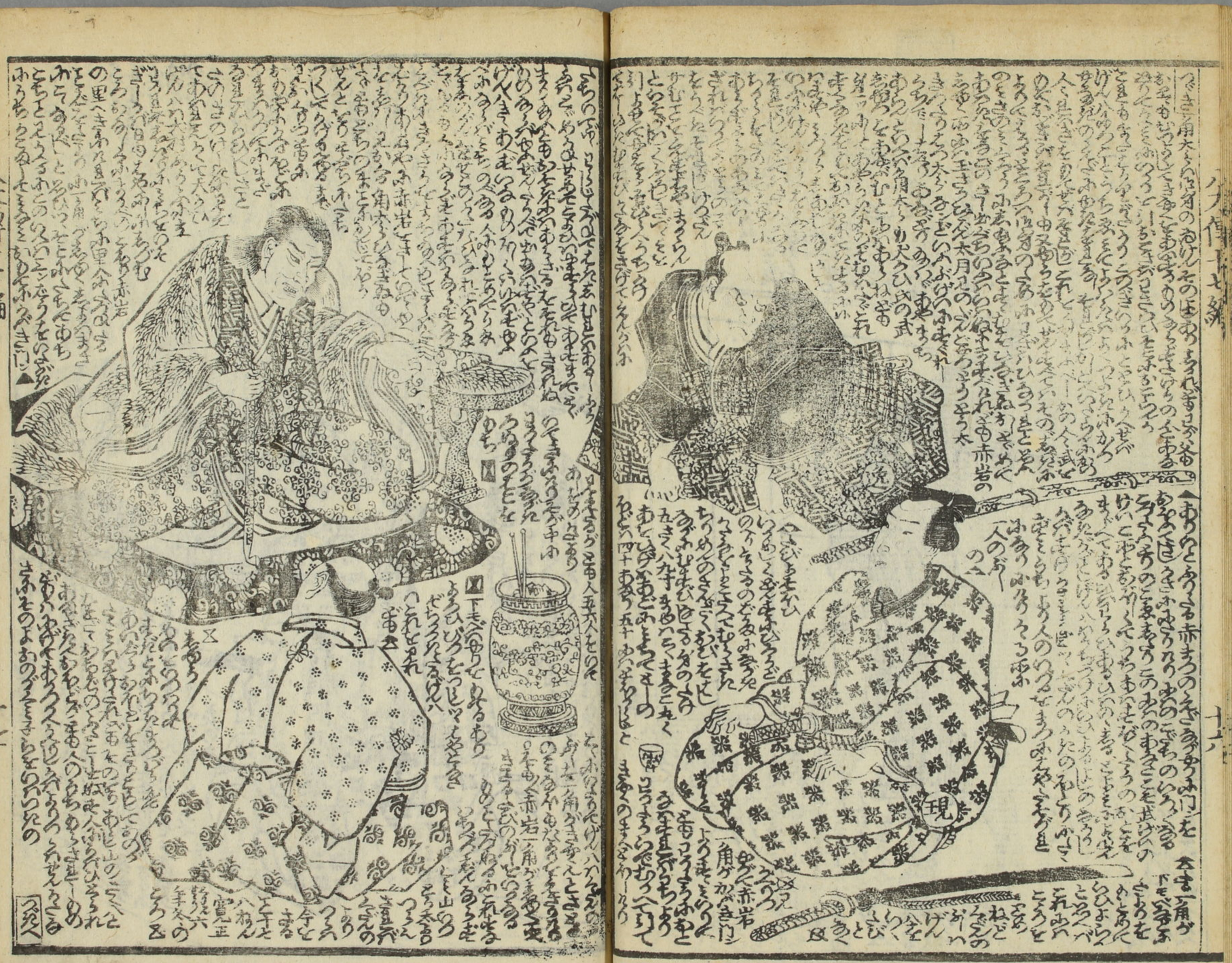
現
角
舟
沢

琴童鈔録

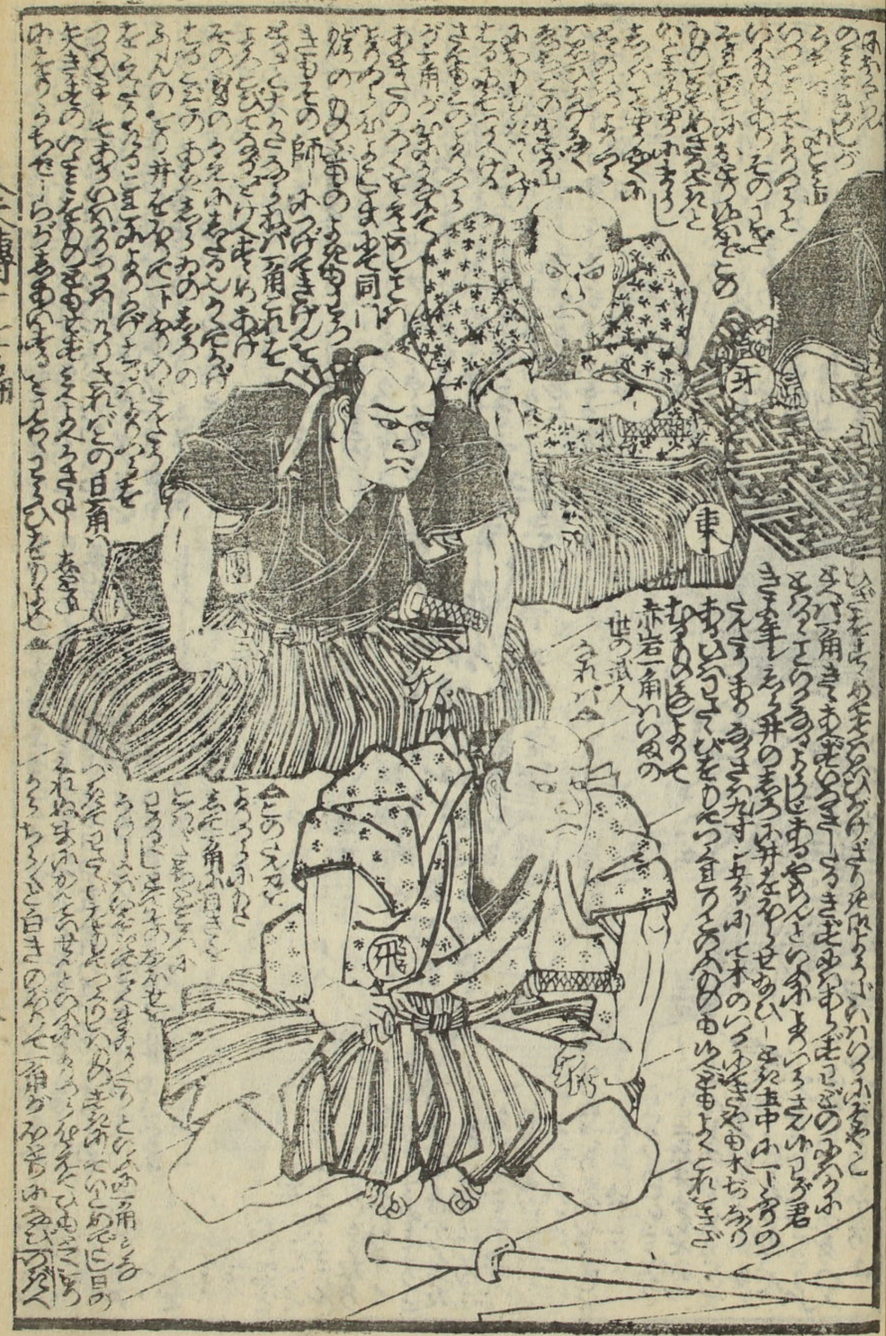
國芳画

上の巻より





現


牙
東
飛

鳳簫菴琴童鈔録

勇齋國芳画

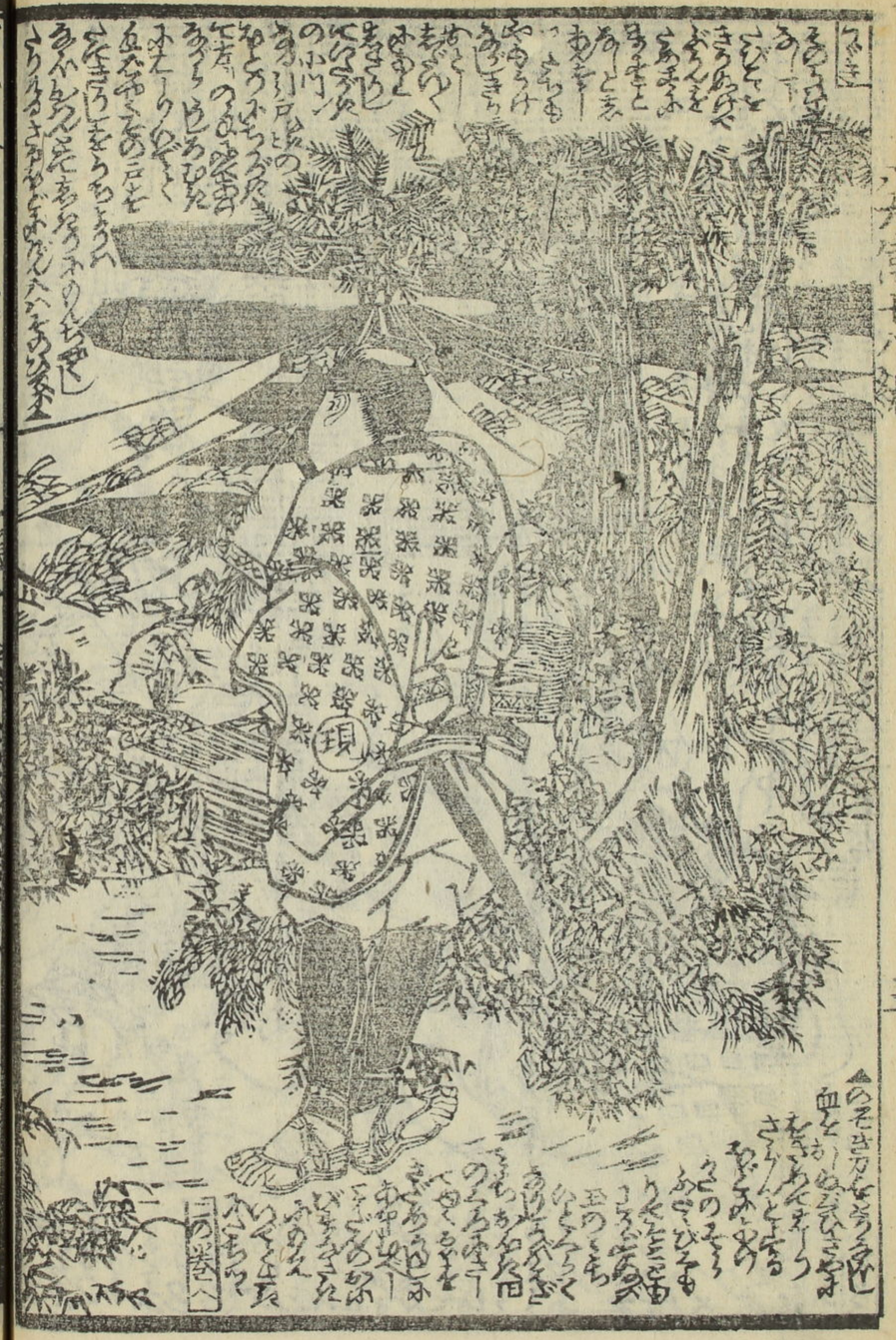
文運の盛衰ハ世道の汚隆ニ係ル事有ゴ記　御代の徳澤ハ文運
手々ニ成盛昌ス　皇国学も漢学もその人ニ之ル事ならんかと嗚呼
されど稗史の行るゝ亦然り戯墨ハ婦幼の玩物なれどその時好ニよりて
盛衰大く異ル稗史の行ハ文化年間を真盛りとす文政の中葉よりその
作ハ衰へさうかくらいぶ五冊尊ーとの類ハ世ニ識るもあれども矢ふもあらんなり
こゝ曲亭の一作の讀本ハ合巻ニ成れ絶筆ニ至るまで流行娘終一ニ
如ー天保の末年かの人情ゝ唱へる猥褻の策子衰へたり世と親ト情ニ
ゝ作者達も越向ハ撫底ニ成りぬ人こゝ祖父の讀本と剽竊摸擬も為尽し
昨今いその文を縮め園圃吞のゆの五丈種ゆ天保五年の作者ハ
ホ槽を舐りて醉ふ人去歳ハ書賈ニ哄誘されて
不編ニとゝふ大会ニ為ふ口ゆゝとも回ふ迴らぬ筆を走らせるのみ

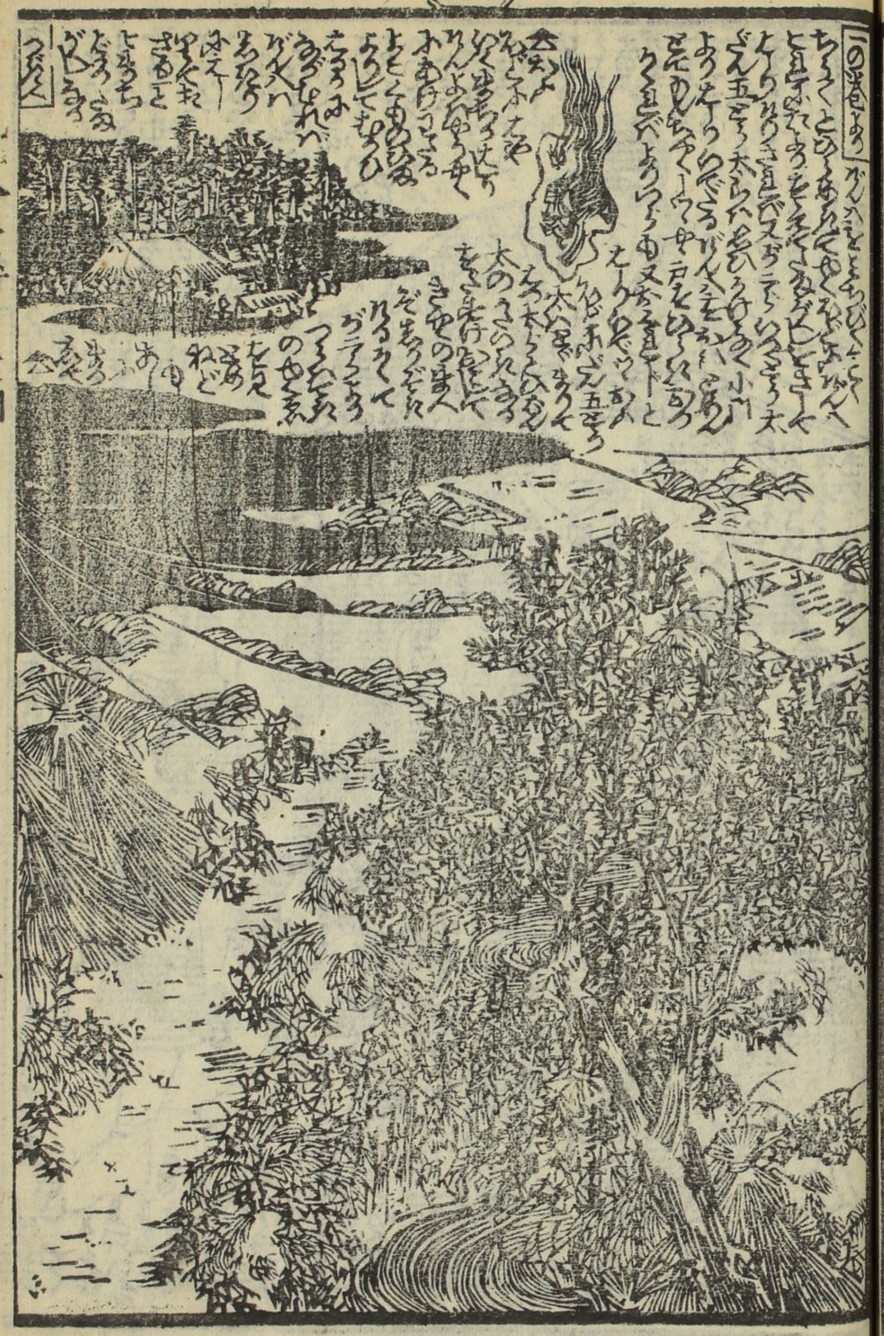
嘉永五子年春穀成同六丑年初春新刻　鳳簫菴琴童誌

李作
娘濱路

泡雪
奈四郎

牙
現

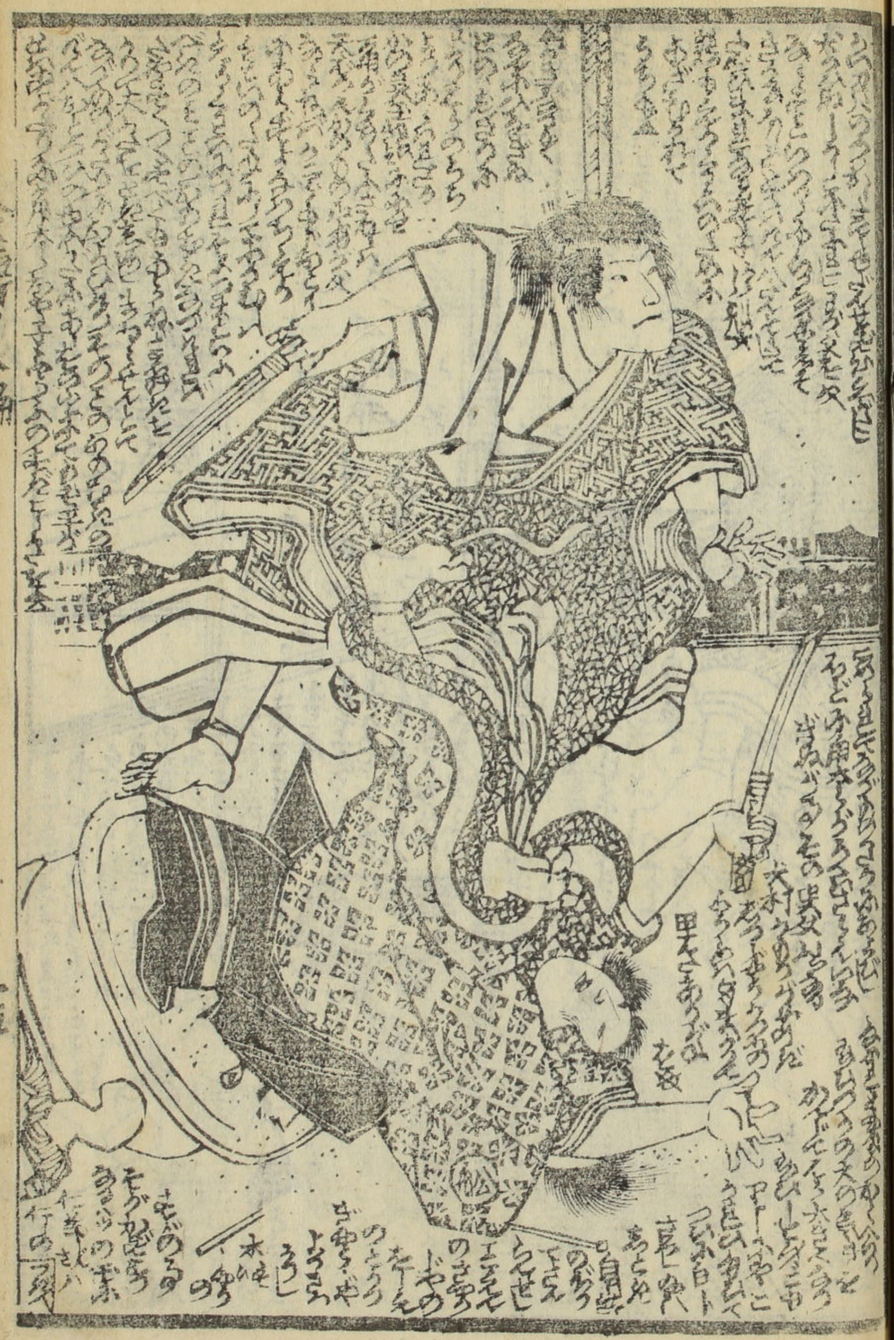

項



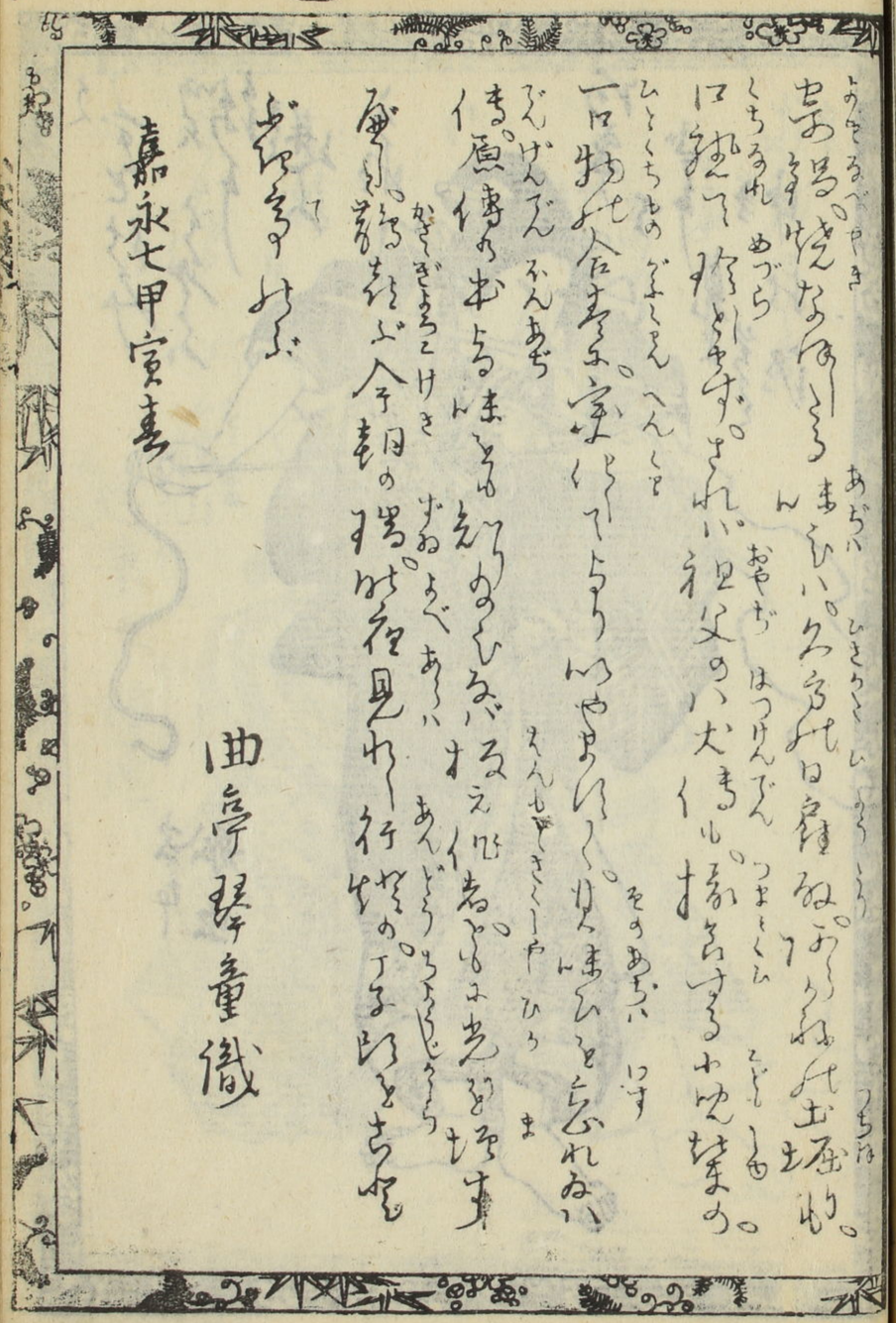
琴童抄録

國芳画

角



山神
土地



嘉永七甲寅年

曲亭琴童識

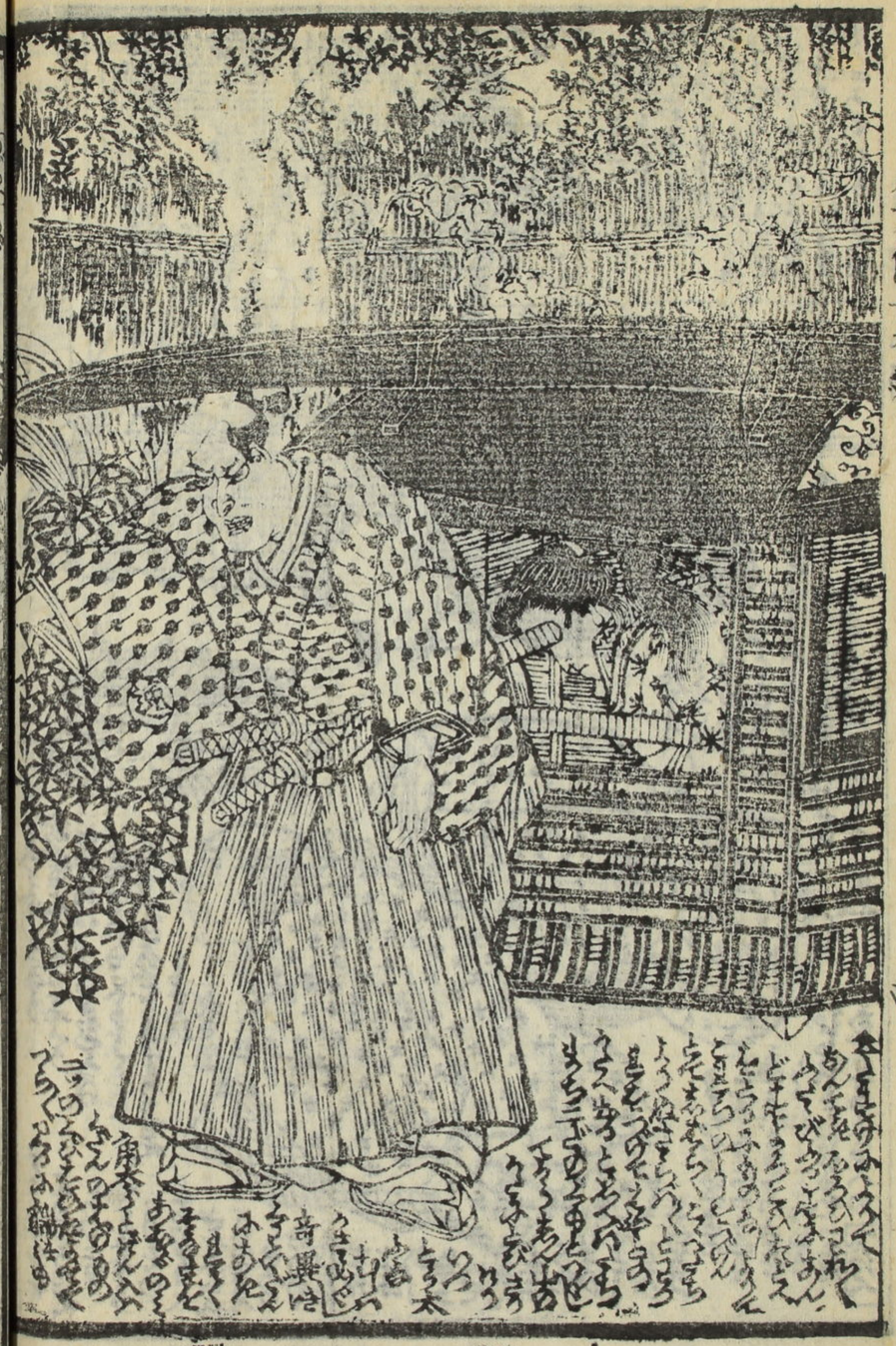
船虫

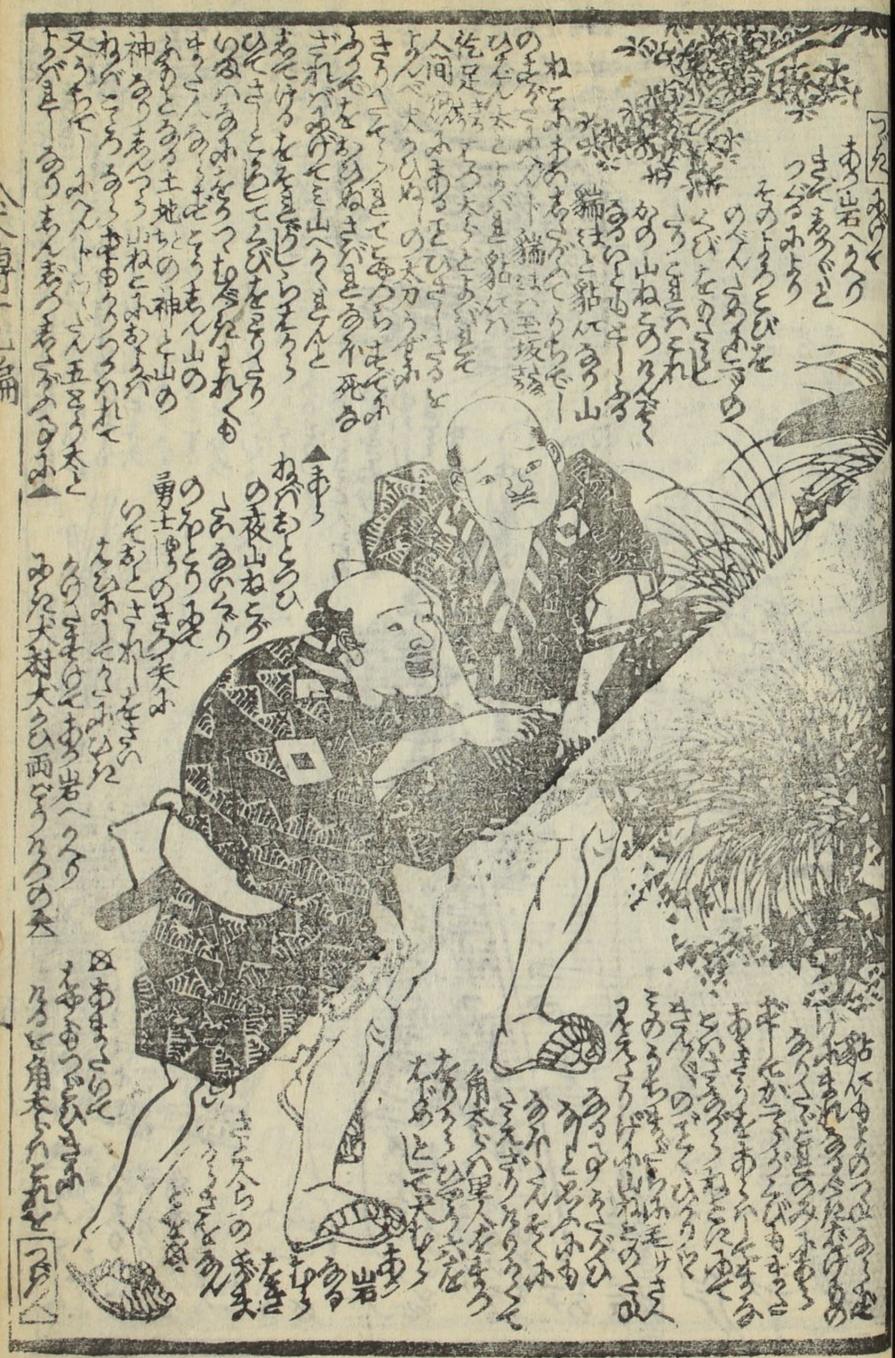
籠山逸東太縁連

犬村角太郎
百
東

現
角

東
閏
長
永





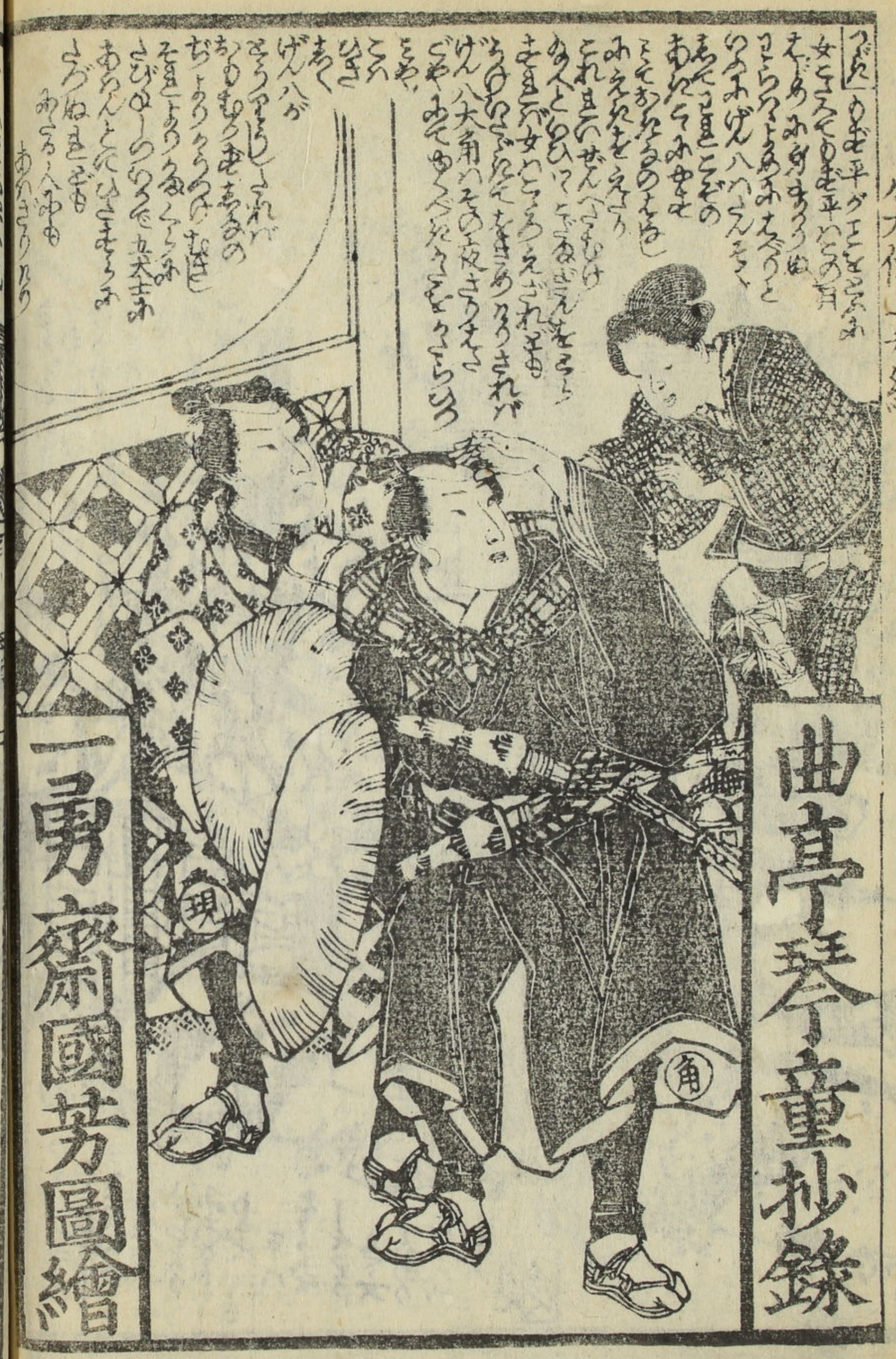
百
百
百

現
角

現
角

現
角

つゞき



八犬傳十九編

曲亭琴童抄錄

一勇齋國芳圖繪

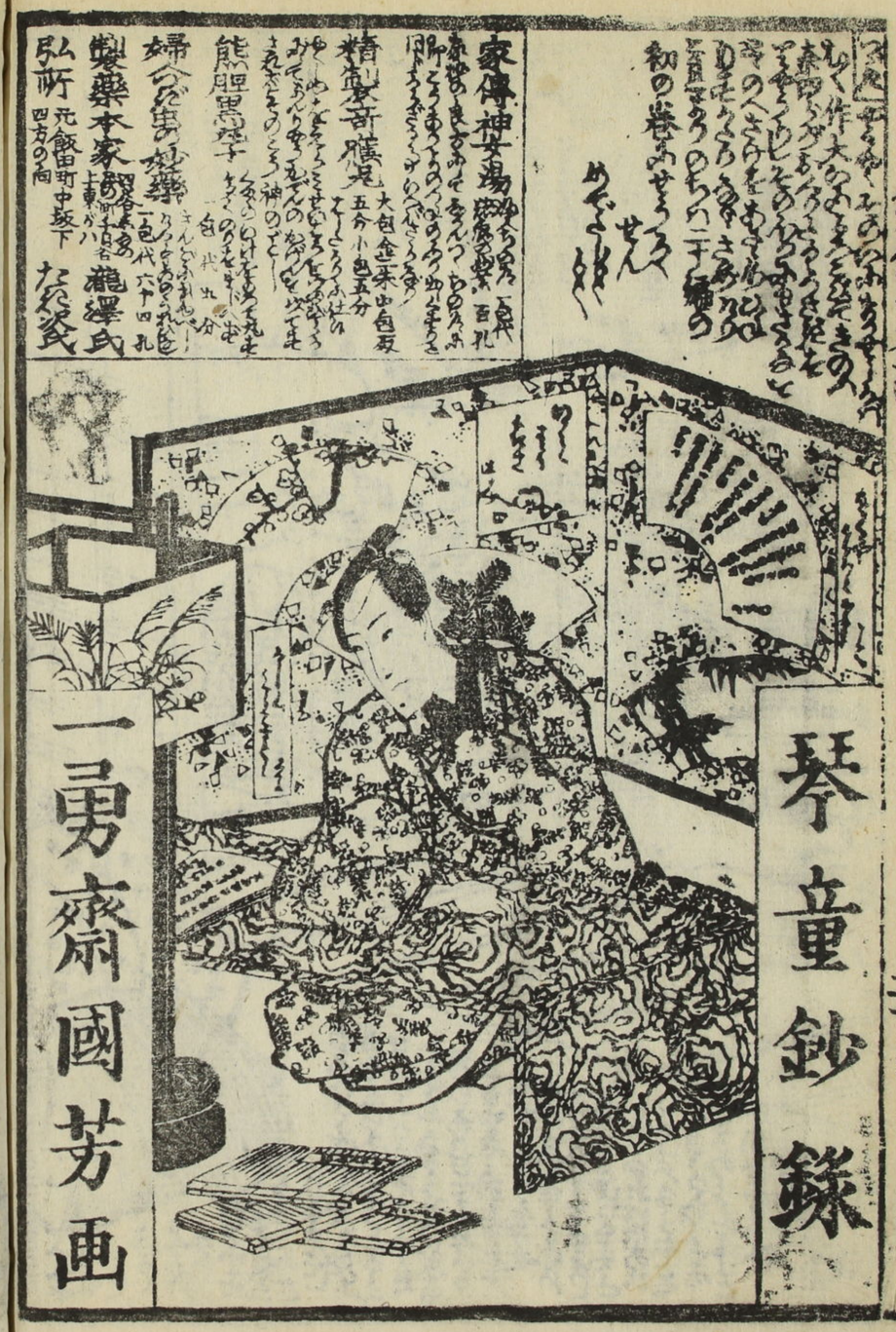
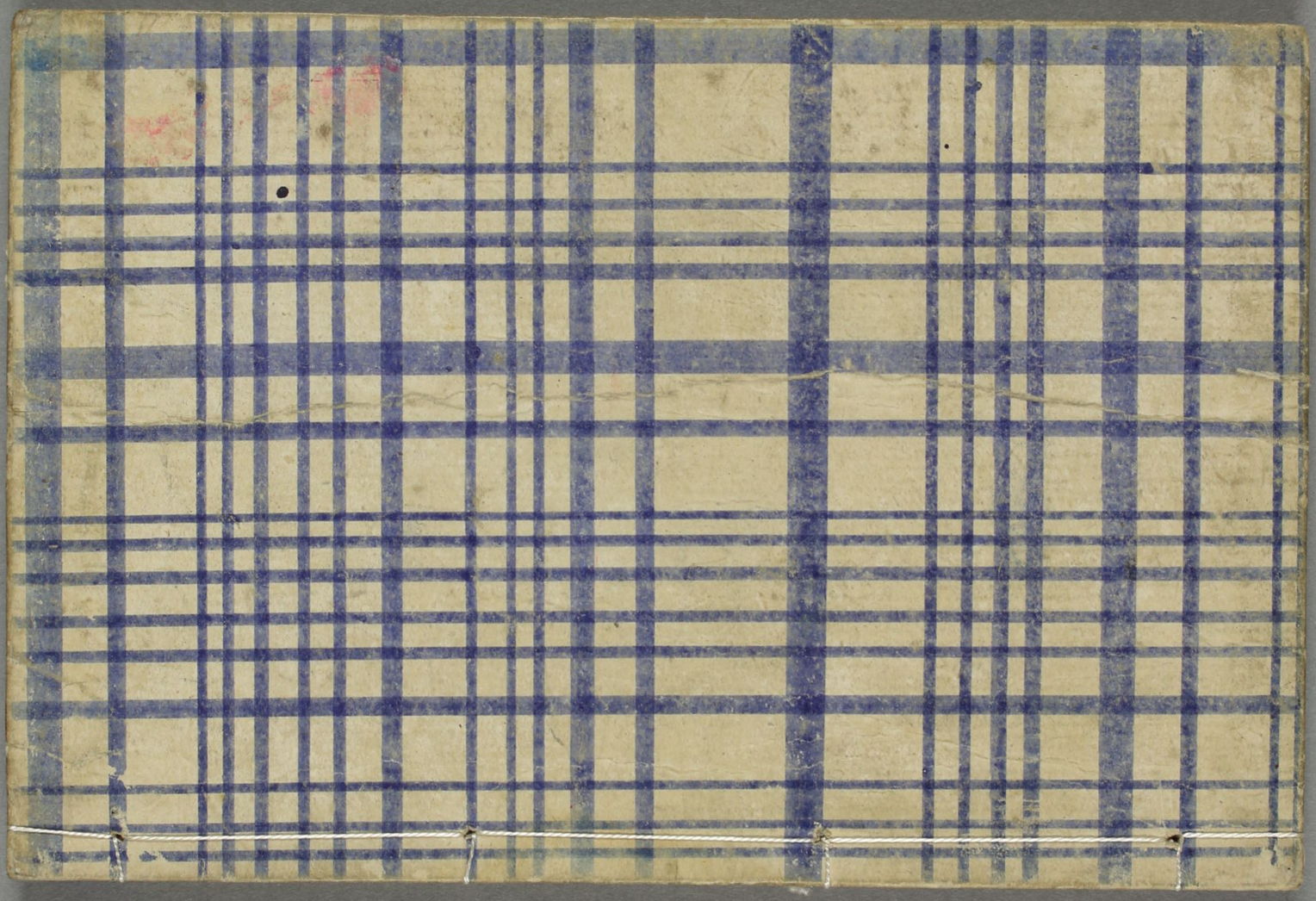
逸

定

信

奈
信
木

信


琴童鈔錄
一勇齋國芳画
家傳神效湯
精製新補足
能熙黑丸子
婦人の虫の妙藥
製藥本家
龍澤氏
弘所
元飯田町中坂下
四方の向